ハウス栽培イチゴの天敵利用防除体系で発生したクローバハダニ
横瀬誠敏（長崎県総合農林試験場）

Infestation of clover mite, *Bryobia pratetiosa* Koch, on strawberry in greenhouse controled by natural enemy

環境保全型農業技術の体系化が叫ばれるようになって久しい。病害虫防除分野でも天敵利用やBT剤利用による減化学合成農薬防除の試みが多数実施されてきた。なかでも、ハウスにおいては早くから天敵利用の試みが行われ、現在ではクローバハダニを利用した防除体系がほぼ確立されつつある。

筆者も1988年、1999年の2ケ年にあたり、ハウス栽培イチゴにおける、天敵利用防除試験に取り組んできたが、ハダニ類、アブラム類についてはクローバハダニとコレマンアブラムを用いて濃縮の許容水準以下の密度に抑えることができることができることを実証した。

ところが、1999年度の試験において、過去の試験ではみられなかった新種のハダニが多発し、その同定を試みた結果、これまで長崎県では防除の対象にされてこなかったクローバハダニであることを確認した。クローバハダニの国内における発生分布域は、これまで北海道、本州、四国のみとされ、九州はその分布域からはずれていた（江原111）。

発生に当たりクローバハダニの同定をしていただいた、農林水産省農業研究センターの御部正博氏に深謝の謝意を表す。

1. 材料および方法

試験は、長崎県総合農林試験場のピニルハウス3棟を用いて実施した。ハウスの大きさは72m²（6m x 12m）で、その中に幅1m、長さ12mのコンクリート柱に囲まれた床と3畳を設けた。

試験区は、天敵利用防除体系（以下：天敵防除区）、慣行防除体系（以下：慣行防除区）および対照区を設け、それぞれの区に各1棟を供試し、反復は設けなかった。供試種類は「とよなみ」を用い、10月1日に各棟に植え30cm、全長2条植え60株を定植した。

天敵防除区には、11月2日にニチニシムシ剤1g/株を剤元処理し、11月5日、11月26日、翌年2月11日にクローバハダニ200頭/180株を、2月11日および2月18日にコロマンアブラムを放卵した（第1表）。慣行防除区には、11月2日にアセタミド剤0.5g/株を剤元処理し、殺ダニ剤として1月13日にクロロフェニルフロンが、12月13日にピリダベンフロアジをそれぞれ散布した。マルチを被覆した。対照区は、ハダニ密度が高く成りすぎて調査に支障を来すと考えられた1月21日にピリダベンフロンを、4月3日にエトサヨーサヨーフロアジを散布した。その他各区の殺虫剤処理は、第1表のとおりである。11月2日の症状処理の後各区にマルチを被覆した。

調査は11月上旬から翌年5月下旬まで、原則として10日隔日に実施し、天敵防除区と慣行防除区は30株につい

2. 結果および考察

ハダニ類の主要発生種はナミハダニで、カンザワハダニの発

生量は少なかった。慣行防除区ではハダニ類に抑制効果のある

剂（第1表）の4回処理ではほぼ十分にハダニ類を抑制できた。

さらに天敵防除区でもクローバハダニの3回放卵で、慣行防除

区とほぼ同等の密度抑制効果が得られた（第1図）。

しかし、天敵防除区では12月

頃からクローバハダニの発生が

みられ、3月上旬頃から寄生虫第2表、各区のピニルハウスの発

生状況

調査結果は第2表のとおりである。これに対し、慣行防除区およ

び対照区では、その発生は全くみられなかった（第2

図）。クローバハダニの場合、そこで使用した殺ダニ剤

に対する感受性が高く、それらを処理することによって

容易に防除できるものと思われた。

クローバハダニの株内分布を調べてみると、上位葉より

も下位葉に多く、その被害も、特に下位葉では葉の部分

がほとんどなくなくなるほど激しい吸収状態に見られた。

また、その寄生は葉の裏表面にみられたが、特に葉表

に集中する傾向が認められた。

今回の調査結果は、tetranychus属のナミハダニやカン

ザワハダニの場合、クローバハダニを用いた生物的防除

によりその密度を慣行防除区並みに抑えることができる

ことを示唆した。しかし、その一方で長崎県ではことに

分布を確認されていなかったbryobia属のクローバハ

ダニが多発する危険性をも明らかにした。

今後、ピニルハウスを用いたイチゴ栽培において、ハ

ダニ類の防除として天敵（クローバハダニ）を導入する場合、寄生虫としてのクローバハダニに対する

対策が大きな課題となる。

引用文献

1) 江原昭三：日本ダニ類図鑑，pp. 271. 全国農村教育

2) 江原昭三：ダニ類，pp. 386－837。東京大学出版会，

3) 前尾昌俊：九州農業 66，80，1989。

4) 柴尾 学, 桔木 実, 田中 寛：関西病虫報 報

5) 土 5－8, 1985。